2～4面　子どもが見た敗戦
5面　大人も読みたい絵本『へいわってどんなこと？』
6～7面　小説『夏の花』を歩こう

The Young Women's Christian Association YWCA

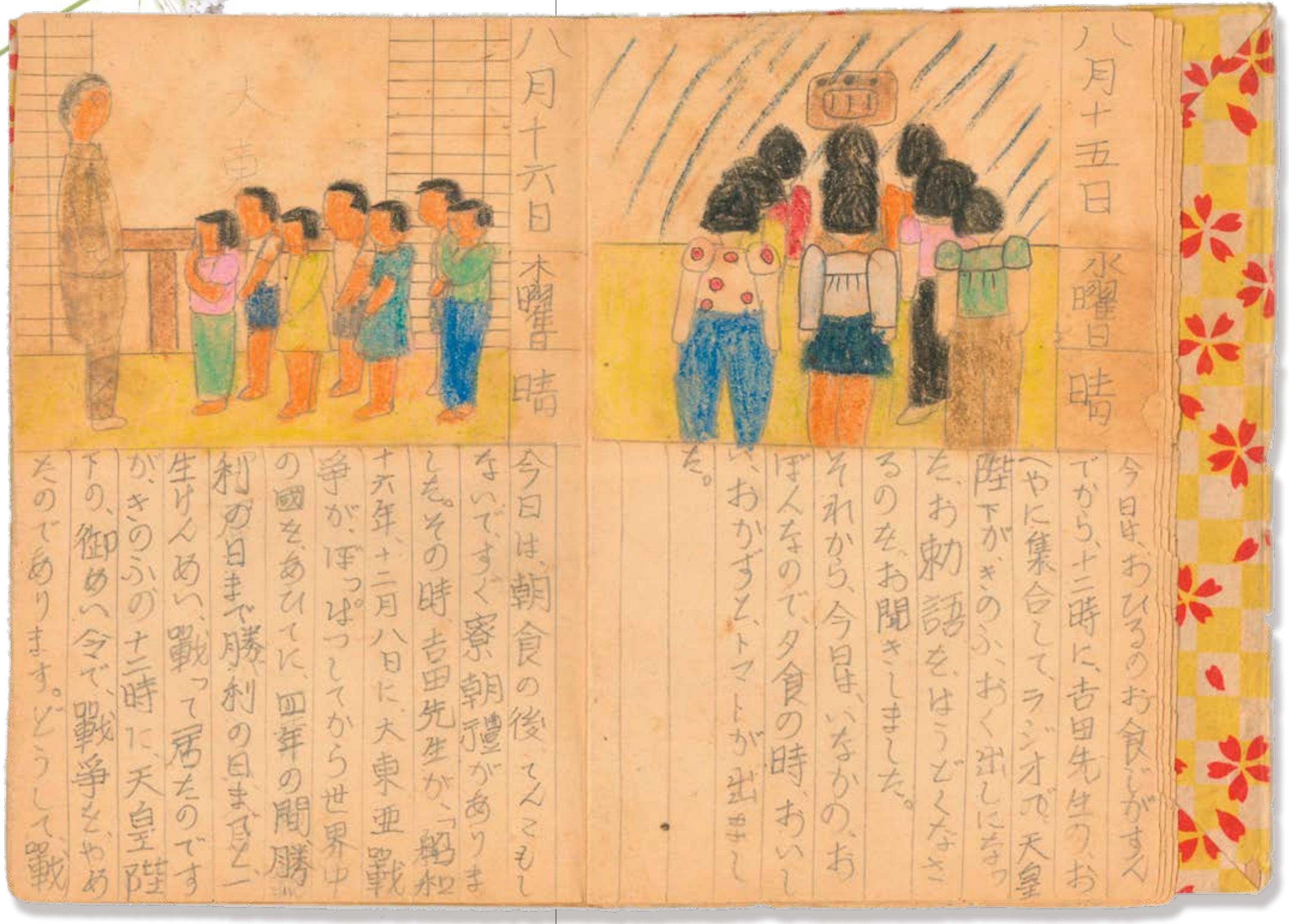
8
AUGUST 2020
No.757
www.ywca.or.jp

〈第32総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
―マタイによる福音書5章9節―

〈日本YWCAの使命（ミッション）〉
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

〈日本YWCAのビジョン〉
地域で女性達が主体的に活動することを通して、
以下の社会をめざします。
（1）平和憲法が生かされ、核も暴力もない社会
（2）女性と子どもの尊厳を守る社会
（3）若い女性がリーダーシップを発揮する社会
（4）多世代・多文化で多様な背景を持つ人びとを尊重する社会

戦争を伝える



前田侑子さん（東京YWCA会員）の
絵日記（詳しくは2面へ）。

平和を考える

1945年8月15日、9歳の少女が書いた絵日記です。
ラジオの前に整列し「玉音放送」を聞く様子が描かれています。
映画やドラマでおなじみの場面ですが、
実際はどうだったのでしょう――
あれから75年。今号では、
遠い過去の出来事になりつつある「戦争」の実相を伝え、
次世代の平和へとつなげるための手がかりを探りました。

エンパワーするNGO
YWCA

「VUCA」の時代の加盟YWCA中央委員会

5月23日、24日、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、第32総会期最後の加盟YWCA中央委員会が初めてオンラインで開催されました。主な議題は、次総会期に向けて世界とつながり、社会変革を担う次世代のリーダーの養成を柱とした新たなビジョンを描くことと、地域YWCAと日本YWCAのよりよい協働のあり方を探ることの二つです。

秋の全国会員総会に向けた最終段階として、次総会期の活動の根幹となるビジョン・ミッション・バリュー案が協議されました。その導入として、協議Iでは若い女性のリーダーシップ養成を主眼とした世界YWCAの2035への共通目標を確認し、日本におけるユース会員の現状と活動が報告され、世代間の協働とリーダーシップの共有の必要性を再認識しました。意見交換を経てビジョン案は原案どおり可決されましたが、「若い女性をエンパワー」することの定義の明確化とコンセンサスが今後の課題です。

さらに、日本YWCA運営委員の半数改選を実現するため、また、今回のような不測の事態で全国会議の開催が困難な場合の決議を可能とするために二つの会則改正案が提示され、前者の改正のために全国会員総会の直前に臨時全国会員総会を開催することが承認されました。

もう一つの重要な協議事項は、困難を抱える地域YWCAに日本YWCAが人的、財政的支援を通じてどう伴走していくかです。具体的な事例として熊本・平塚YWCAの発表を聞きました。また、コロナ禍の終息が見えない今、地域YWCAの活動に及ぼす影響と対応について、出席者から切実な声を聞き、日本YWCAとして迅速に対応しなければならないと思いました。

最後に沖縄の基地問題に関する声明を全会一致で採択し、閉会。環境が複雑化し、将来の予測が困難な「VUCA※」と呼ばれる時代だからこそ、国内外のYWCAと連帯し、VUCAを乗り越え、知恵と祈りを合わせて共に進みたいと思いました。

日本YWCA副会長　吉田亜希

※Volatility（変動性）Uncertainty（不確実性）Complexity（複雑性）Ambiguity（曖昧性）の4つの単語の頭文字をとった造語。先の見通しが立ちにくい複雑で不安定な社会を表す言葉としてビジネスシーンで頻用されている。

新型コロナウイルス感染症対応のためYWCAの活動をご支援ください

新型コロナウイルス感染拡大の影響で困難な立場に置かれている人々がいます。YWCAは、日本全国24の拠点、また世界100か国以上において、すべての人が等しく安全であるために働いています。活動を続けるためのご支援をお願いいたします。

取り組みの一例を紹介しています
http://www.ywca.or.jp/COVID-19_response.html

振込先
郵便振替 00170-7-23723　公益財団法人日本YWCA
※通信欄に「災害時支援募金」とご明記ください。
皆さまのご協力を、心よりお願いいたします。

ご協力ありがとうございます

賛助費
大野綾子　鶴崎祥子
郡恭子　杉田佐紀子
松原恵美子

ピースメーカーズ募金
（平和をつくり出す女性のリーダーシップ養成）
鶴崎祥子
松原恵美子
プール学院中学校・高等学校
一般財団法人広島ＹＷＣＡ

災害時支援募金
（オリーブの木キャンペーン募金）
鶴崎祥子

（国内外の災害被災者支援）
鶴崎祥子
東洋英和女学院中学部高等部　母の会

東日本大震災被災者支援募金
牧甫　清水嶋孝
鶴崎祥子　塗芙紗子
捜真女学校　奉仕委員会
横浜共立学園
一般財団法人　広島ＹＷＣＡ

（カーロサポーターズ募金）
カーロサポーターズ　63件

（2020年3月26日、4月16日～6月15日　敬称略）

※6月号同欄（2月26日～4月15日）において3月26日分の記載が漏れていたため当月号に掲載しました。関係者の方々にお詫びとご寄付のお礼を申し上げます。

発行所 公益財団法人日本YWCA　〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11　東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121　Fax.03・3292・6122　office-japan@ywca.or.jp　www.ywca.or.jp
編集発行人 実生律子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています　メルマガ登録　y-net@ywca.or.jp　にお名前を送ってください ／ フェイスブック　www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

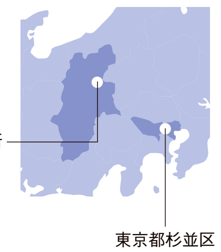
子どもが見た敗戦—1

1945.8

先生も、お友達も、目に涙を浮かべていた

東京YWCA会員 前田侑子（当時9歳）

当時は東京都杉並区の国民学校３年生。
1945年3月20日から8月19日まで、
長野県の別所温泉へ学童疎開をしていた。
絵日記はその時に書かれたもの。
わら半紙を糸でつづり表紙に千代紙を貼った
手作りのノートに日々の出来事が記されている。



八月十五日　水曜日　晴

今日はおひるのお食事がすんでから、十二時に、吉田先生のおへやに集合して、ラジオで、天皇陛下が、きのふ、おく出しになったお勅語を、はうどくなさるのを、お聞きしました。それから、今日はいなかのおぼんなので、夕食の時、おいしいおかずとトマトが出ました。

八月十六日　木曜日　晴

今日は朝食の後、てんこもしないで、すぐ寮朝礼がありました。そのとき、吉田先生が「昭和十六年十二月八日に大東亜戦争がぼっぱつしてから世界中の国をあひてに四年の間、勝利の日まで勝利の日までと、一生けんめい戦って居たのですが、きのふの十二時に、天皇陛下の御めい令で、戦争をやめたのであります。どうして戦争をやめたかといふ、げんいんが二つあります。その一つは、今度出来たげんしバクダンといふ、おそろしいバクダンでバクゲキされたら、それこそだめになってしまふことと、ソレンと戦ひを初めたので、あんな国と戦争をしたのではまけるかもしれないといふことを、天皇陛下は大へん御心配になって、戦ひをやめたのであります。けれど最後に一こといっておきます。日本が戦争をやめたといふことは、むじゃうけんかうふくでは、ぜったいありません。」とおっしゃいました。先生も、お友達も、みんな目に一ぱいなみだを浮かべてゐました。私も急になみだが出てきました。それから、別所校で、八月十四日に、天皇陛下がおく出しになった勅語のはうどくしきがあって、その後で又、その、お話がありました。

八月十七日　金曜日　晴

今日は夕食がすんでから、おさんぽがてらに、緑屋の兵隊さんの所へ行きました。たき火をして、新しいちゃうめんや手ちゃうをもしていたので、もったいないといっていただきました。そして、みんなで、陸軍の歌を歌ってあげると、「もう今日から、そういう歌をうたってはいけませんよ。」と兵隊さんがおっしゃいました。

※原文まま、旧漢字のみ現代漢字に直しました。

学童疎開なんて何の意味もないこと

生まれた時から戦争でしたから、空襲も疎開も当たり前のことでした。8月15日は玉音放送を聞いている絵を描きましたが、よく分かりませんでした。それよりも空腹で、夕食のトマトが一番の関心事でした。翌朝、涙しながら説明する先生を見て、子ども心にこれは一大事だと察し、ひと言ももらさず書き留めねばと思って書きました。

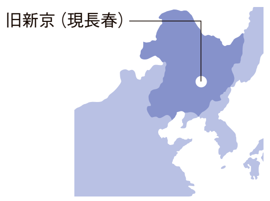
学童疎開なんて、何の意味もないことです。疎開中に9か月の弟を、その秋には16歳の兄を失いました。絵日記を見るたびに、取り戻せない時間を思います。84歳になりますが、記憶が確かなうちに、私が体験した戦争を伝えておきたいです。（談）

子どもが見た敗戦—2

1945.8

日本人はよその国に来て勝手なことをしていたんだな

大阪YWCA会員 澤田祐子（当時9歳）



8月9日 万一の時はこれを飲むように

私は旧満州（現在の中国東北地区）で生まれ育ち、敗戦時には4年生（9歳）、満州国の首都新京に住んでいました。1945年8月9日未明のソ連軍による空襲から始まったもろもろのこと、社宅の集会所に集まった母達に、関東軍の軍人が「関東軍は新京を死守するので皆さんも落ち着いて行動して欲しい、しかし万一の時はこれを飲むように」と青酸カリが配られたこと、次の朝（10日）社宅内の2家族の母子5人がガス心中したこと（お父さんは出征中）、夕方には「疎開することになった、第1陣は明朝9時に出発するから準備するように」と連絡がまわり、社宅中が大騒ぎになったこと、その後行く先もわからないままに出発していく家族が増えて、15日残っていたのは70～80世帯の内6世帯だけだったことなどは、私にとっては異常な経験でした。

8月13日 船長さんは最後まで船に残るのではないの?

中でも驚いたのは13日の夕方近所の小父さんが、父が出張中の我が家へ駆け込んできて、「奥さん、疎開しなきゃだめですよ。いったいどうなっているのか関東軍司令部へ行ってみたら、誰もいないんですよ。満州政府の官舎も空っぽだし、社長さんもとっくに出発されましたし」と言う声を聞いたときです。私は一瞬「えっ、船長さんは最後まで船に残るのではないの?」と思い、同時に裏切られたというような複雑な気持ちになりました。船長は船が沈没するようなとき、最後まで船に残るものだと国民学校で教えられていたのです。

結局我が家は疎開せず、14日夕方父が奇跡的に帰宅できて15日の放送を聞きました。

8月15日 そこら中に青天白日旗 満州は中国だった

日本国内では、今晩からゆっくり寝られるなど、ほっとした雰囲気があったようですが、旧満州ではこれからが大変でした。15日の午後、父が様子を見に市の中心部に出かけると、あちこちの中国人の家に青天白日旗が掲げられていたそうです。確かに満州は中国だったのです。満州は無政府状態になりました。日本人はみな職を失い、毎日の食料に困ることになりました。満州の北から南へリュック1つで避難していた日本人の中から、この冬大勢の餓死者や凍死者がでました。

我が家の近所は空き家ばかりになりましたが、疎開の途中で終戦を知った人たちが戻ってきたのと、他所からの避難途中に通りかかった人々に社宅を提供したので、どの家にも何家族かが一緒に住むことになりました。父達は残っていた食料を分け

たり、中国人の市場に共同購入にいったり、進駐してきたソ連軍に、この地区には軍関係者はいないと説明したりして社宅全体の安全を守りました。この地区ではソ連兵による被害も中国人による略奪もありませんでした。

中国のお友達はこんな所で勉強していたのか

私の通っていた国民学校では9月初旬にソ連軍が校舎を接収に来た時、校長先生が「子どもには罪はない、あなた方は自分の子どもには教育を受けさせたいと思うでしょう。日本人も同じです。どうか校舎を使わせてください。」と頼んで許可を得、9月中旬に再開されました。午前中だけの授業だったと思いますが、元の校舎を使っての再開は旧新京ではここ1校だけで、東光塾という名で46年7月に日本人の引き揚げが始まるまで続きました。

この間、私にとって大きな意味を持つ出来事は、46年3月末にソ連軍が撤退したあと、中国政府の命令で校舎を中国人学校の校舎と交換したことです。私が入学した国民学校の校舎は、レンガ造りの2階建て、全館スチーム暖房の立派なものでした。ところが中国人学校に行ってみると、校舎は大変粗末で土間の教室が並んだ平屋の建物と、小さな木造2階建てがぽつぽつ建っているだけでした。中国のお友達はこんな所で勉強していたのか、私は本当にびっくりしました。

その日校長先生から次のようなお話がありました。「私達が住んでいるところは中国で、そこで何不自由なく勉強できていたのは、武力を後ろ盾にしていたからだ。今後日本は武力ではなく文化の力で尊敬される国にならなければいけない。新京は以前長春という地名だったが、日本人が入ってきて新京と変えたので、これからは長春とよぶように。」私は「なるほどそうだったのか、日本人はよその国に来て勝手なことをしていたんだな。」と納得しました。申し訳ない気持ちでした。日本人が中国人や朝鮮人を馬鹿にしたり、ひどい仕打ちをしたりするのを見たり聞いたりしていて、子ども心に何となく違和感があったのです。

情けなくて涙が出ます 戦後70年、悲しいです

我が家が日本に引き揚げたのは、父が中国政府から技術者としての留用を解かれた1947年の秋です。父40歳、母39歳でした。家を出てから父の郷里につくまで3か月かかりましたが、道中私がとてもこだわりを感じたのは大人達の「帰る」という言葉でした。コロ島で船に乗った時、大人達が口々に「これで日本に帰れるぞー」と叫んでいるのを聞きながら、6年生の私は「帰るんじゃない、行くんだ」などと思っていました。引き揚げ時、一人千円の現金以外の財産はすべて持ち帰り禁止で、その後の生活も苦しいものでした。

私はこのように、賢明で謙虚で勇気のある大人達に守られて、無事に成長できましたが、それでも当時の不安感や悲しみを忘れることができません。近年あの戦争は侵略ではなかったとか、仕方なく始めたのだなどという声が大きくなり、またもや中国や韓国・朝鮮の人達を馬鹿にしたり敵視したりし、首相が「邦人救助のために……」などと勇ましく演説するのを聞くと、情けなくて涙が出ます。戦後70年悲しいです。

※公益財団法人大阪YWCA発行『戦後70年によせて』(2015年)に掲載された手記を転載したものです。本文は原文まま。タイトル、見出しは編集部で加筆しました。

手記を書いてから5年が経ちましたが、私の悲しみを癒してくれるようなことは何も起こらず、悲しみの上に怒りが加わったようです。

今回の新型コロナウイルス感染拡大による生活の不便さが、戦争中の生活などと対比されて語られることが意外に多く、腹立たしいとともに、

戦争のむごさを語り継ぐ難しさを痛感しました

戦争というもののむごさを語り継ぐのがなかなか難しいことを痛感しました。

「若い皆さん、もう少し想像力を高めてください。戦争中は出征したお父さんや兄弟がどこで戦っているのか、生きているのかどうかもわからなかったのですよ」と叫びたいです。

子ども目線で語りかける平和のかたち

日本、中国、韓国の絵本作家がともに作った「日・中・韓平和絵本」シリーズ。その中の一冊『へいわってどんなこと?』(童心社)が反響を呼んでいる。2011年の初版以来、版を重ね累計10万部を突破。多くの人を引きつける、その魅力を紹介する。

生きる喜びを伝える平和の絵本を

『へいわってどんなこと?』は、子どもたちの日々の生活の中にある「平和」のかたちを描いた絵本だ。食べること、遊ぶこと、安心して寝ること、抱きしめてもらうこと……十人十色の子どもたちが、生きる喜びを紙面いっぱいに謳歌する。作者で絵本作家の浜田桂子さんは、小さな子どもにも、「戦争とは何か」とともに「平和の素晴らしさ」を、自分に重ね合わせて感じられるような「平和絵本」を描きたいと思い続けてきたという。

「日・中・韓平和絵本」プロジェクト

「いっしょに平和の絵本を作りませんか」浜田さんを含む日本の4人の絵本作家が、中国・韓国の作家8人に呼びかけたのは2005年から翌年にかけてのこと。当時、国家間には政治的な摩擦があったが、12人の絵本作家たちは、アジアにおける戦争被害の実相を知り、互いの痛みを共有していくことを出発点として、信頼関係を築いていった。制作にあたっては、一人1冊作ること、3か国で共同出版すること、制作過程で意見を求め合うことを取り決めたという。

韓国の作家と激論を交わして

この絵本では「へいわってどんなこと?」という問いかけに、子どもの「ぼく」が「きっとね、へいわってこんなこと」と応えていく。下書き段階で浜田さんは、平和とは「せんそうのひこうきがとんでこないこと。」「そらからばくだんをおとされないこと。」と表現していたそうだ。戦争を引き起こすのは大人で、子どもはいつも戦争で傷つく被害者。そう考えて「受け身」の表現を用いたのだ。それに対して韓国の作家たちから、「日本人が無意識に持つ戦争の被害者意識のあらわれではないか」と厳しい指摘を受けたという。お互いに激論を交わす中で、新しい表現が生まれた。それは、世界中の子どもたちから、戦争を起こす大人たちにむけて発信する、決意を込めた力強いことばだった。

「日・中・韓平和絵本」シリーズ。それぞれの国で、それぞれの言語で刊行

この春には香港版『和平是什麼?』が刊行された

『へいわってどんなこと?』

浜田桂子 著

童心社 発行/1,500円+税

きっとね、へいわってこんなこと。
せんそうをしない。
ばくだんなんかおとさない。
(中略)
へいわって ぼくがうまれて よかったっていうこと。
きみがうまれて よかったっていうこと。

『へいわってどんなこと?』より

いのちの尊厳が守られること

この絵本の中で「ぼく」が語る平和、一人ひとりのいのちの尊厳が守られる世界は、いま実現しているだろうか。アジア・太平洋戦争の敗戦から75年経ち、かつての戦争が「遠い記憶」となっていく一方で、世界は今もさまざまな紛争の火種を抱え、人々は差別や抑圧に苦しんでいる現実がある。この夏、絵本を開いて、子どもたちや身近な人と、「平和ってどんなこと?」「どうしたら平和になるんだろう?」と話し合ってみてはどうだろう。

編集部　清田悦子

参考資料/『EhonNavi』平和を訴える絵本シリーズインタビュー浜田桂子さん(2011年5月25日掲載)、童心社ホームページ特設サイト

核のない世界のための一歩
『夏の花』を歩いてみよう

原爆投下直後の災禍を伝える短編小説『夏の花』。
被爆した作家が辿った道を、夏の一日、自分の足で歩いてみた。
小説に刻まれた原爆の記憶を辿り、見えてきたのは――

元安川と原爆ドーム。三角洲に広がる広島市は6本の川が流れる水の街でもある

民喜と同じ道を歩み同じ景色を見る

原爆ドームの近くに、気付かずに通り過ぎてしまいそうな小さな碑が佇んでいます[1]。それが原民喜の詩碑であると知ったのはごく最近のことでした。

日本YWCAで半世紀の歴史のある平和教育プログラム「ひろしまを考える旅」に携わる中で、原爆文学の代表作『夏の花』と出合いました。

詩人で小説家の原民喜[2]が広島の実家に帰省中に被爆し、郊外の村に避難するまでの体験を記したこの短編を初めて読んだとき、一瞬の閃光、肉の焼け焦げる匂い、水をくれと息絶え絶えに訴える声……地獄絵図のような光景がまざまざと浮かぶような、しかし静謐な文体で淡々と綴る描写に強い印象を受けました。民喜の義弟で文芸評論家の佐々木基一が、民喜の三十三回忌を機に『夏の花』に描かれた民喜がたどった道筋を追って、小説の場面を追体験したと書いているのを読み、私もいつかこの小説の舞台を歩いてみたいと思っていました。「文学散歩」でも「聖地巡礼」でもなく、ただ民喜と同じ道を歩み、同じ景色を見るために。

いまも残る被爆の痕跡、川辺の暮らしの跡

国内外から大勢の人が訪れる8月6日の原爆投下の日を過ぎても、広島の街は旅行客で賑わっていました。銀山町で路面電車を降り、日差しと暑さに目がくらみそうになりながら向かったのは、民喜の生家跡。

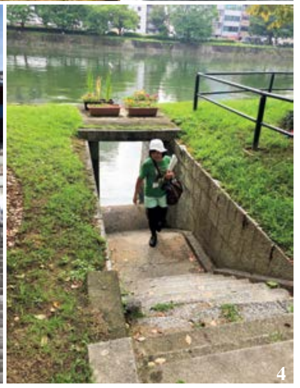
前年に妻と死別し、郷里に疎開していた民喜は原爆投下の朝、たまたま便所に入っていたために九死に一生を得ました。その被爆の瞬間の描写が妙に非現実的でコミカルでさえあるところが、かえってそれまでの平凡な日常と、突然降りかかった破壊と殺戮との対比を際立たせているように思います。繊維業を営んでいた原家は戦争で財を成し、今はマンションが建っているこの場所も、近くにある世界平和記念聖堂を含む辺り一帯が原家の敷地だったそうで、その富裕ぶりが見てとれました。

しばらく歩くと京橋川に出ます。川沿いに並ぶおしゃれなオープンカフェを過ぎて河岸緑地を歩いていくと「原民喜ゆかりの被爆柳[3]」がありました。かつてはここに民喜の持ち家があって、この柳の木はその敷地内に生えていたと案内板に書かれています。短編『火の踵』には、母からこの家を相続したものの、ずっと次兄が住んでいて、民喜の妻はよくあの家で暮らしたいと話していたとあります。この辺には家や庭から水辺に降りられる「雁木[4]」と呼ばれる階段が残っていて、民喜の妻も水に親しむ暮らしに憧れていたのかもしれません。

京橋川に架かる栄橋は被爆建造物の一つです。あの日、栄橋のたもとには「避難者がぞくぞく蝟集して」いて、民喜はここから、市民の避難先に指定されていた泉邸（現在の縮景園）に向かったとあります。

書き残すことに生きている意味を見出す

縮景園は近代的な街並みに突如現れた本格的な日本庭園で、江戸時代に造られた大名庭園「泉水屋敷」に由来します。目の前に広がる池とそれを取り囲む豊かな自然からは、原爆投下で壊滅的な被害を受けた当時の様子は伺いしれません。



見上げる樹木もおおかた中空で削ぎとられており、川に添った、この由緒ある名園も、今は傷だらけの姿であった

広い園内は日差しを遮るものもなく、じりじりと照りつける太陽の下、私の住んでいる北海道では見かけない竹林を珍しく眺め、園内に埋葬された被爆者の慰霊碑の前で頭を垂れて、再び京橋川の岸辺に出ました。

建物が崩れ、火が燃え始めた対岸を見やり、川岸に腰を下ろした民喜は心の内でつぶやきます。

今、ふと己れが生きていることと、その意味が、はっと私を弾いた。このことを書きのこさねばならない

家族と再会し、火災を避けて川を渡ろうとして、民喜は言語に絶する人々の群れに出会います。その様子を描いた詩『コレガ人間ナノデス』を読むと思わず目と耳を覆いたくなります。

原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
肉体ガ恐ロシク膨脹シ
男モ女モスベテ一ツノ型ニカヘル
オオ　ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ
爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ
「助ケテ下サイ」
ト　カ細イ　静カナ言葉
コレガ　コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス

この有様を伝えよと天の命ならんか

次に向かうのは広島東照宮[5]。被爆の翌日、民喜と次兄の家族はこの東照宮の鳥居の下に設けられた被災者のための施療所にやってきました。

境内到る処に重傷者はごろごろしているが、テントも木蔭も見あたらない。そこで、石崖に薄い材木を並べ、それで屋根のかわりとし、その下へ私たちは這入り込んだ

境内にはまさにそのような石垣がありました。ここで民喜は持っていた手帳に自らの見聞と経験を克明に記し、そのノートが後にこの『夏の花』に結実します。境内の碑にはノートの一節が刻まれています。

コハ今後生キノビテコノ有様ヲ
ツタヘヨト天ノ命ナランカ

この言葉どおり、民喜は1951年に自死するまで原爆を描き続けたのでした。最愛の妻と死に別れ、抜け殻のように暮らしていた40歳の民喜が、瞬時に何万人もの命を奪った原爆の災禍によって、かりそめの生とこの惨状を後生に伝える使命を与えられたのは運命の皮肉かもしれません。

忘れてはならない語り継いで、行動せよ

東照宮で一昼夜を過ごした民喜は馬車で八幡村へと逃れました。私の旅もひとまずここで終わりです。緑の木々、肌を刺すような暑さ、川辺の水音など、五感を総動員して『夏の花』の場面を実際に歩いてみることで、原爆の被害の実相を単なる過去の悲惨な出来事ではなく、自分に引きつけて考える契機を与えられました。

広島への原爆投下から75年が経ち、当時を知る被爆者の方々が減っていく中、『夏の花』に刻まれた原爆の記憶は風化することなく、私たちに訴えるのです。ヒロシマの痛みを忘れてはならない。この体験を語り継いでほしい。そして核のない世界のために行動せよ、と。

編集部　吉田亜希

出典／『小説集　夏の花』（岩波文庫）、
『原爆小景　コレガ人間ナノデス』